

「先の者があとになり、あとの者が先になる」

みなさん、おはようございます。台風一過、日ごとに秋の色が深まってきているように感じます。本日は 1928 年(昭和 3 年)9 月 23 日に初代亀水松太郎牧師によって天王寺区大道の地に福音の種が蒔かれて 93 周年ということで、コロナ禍にあって少人数ですが、記念礼拝を行うことが出来ますことは大変感謝なことでもあります。ウィキペディアによると、ちょうど同年の 9 月に世界初の抗生物質であるペニシリンが英国の学者フレミングによって発見されたと記されていましたが、その 10 年前の 1918 年(大正 7 年)と言えば、スペイン風邪の第 1 波が到来した年であります。ヨーロッパから世界中に広がったスペイン・インフルエンザとも呼ばれていますが、チフスやコレラなど、人類の歴史において 100 年以上前から感染症との闘いが続いていることを改めて思います。昨年 9 月 20 日に行われた創立 92 周年の礼拝では、週報を見ますと 22 名の方々が出席しておられますが、その昨年の第 2 波のあとの状況と、現在、第 5 波の出口の手前にあるのか？分かりませんが、重傷者の方や自宅療養者の方々の数など、1 年前と状況がかなり異なっていることを思います。現在、季節の変わり目の時を迎えていますが、このまま緩やかに事態が収束に向かいますように今朝も皆さんと共に祈りを合わせたいと思います。多くの療養中の方々の命が支えられ、回復に向かいますよう心よりお祈り致します。

さて、今日は 9 月の第 3 聖日の聖書日課表(日毎の糧)に示された聖書箇所、マタイによる福音書 19 章の 13 節から 30 節までとなります。主イエスがみ許に集まって来た子どもたちを祝福する場面から始まっています。離縁についての問答を終えた後、人々が主イエスに手をおいて祈っていただくために、幼い子どもたちを連れてくる様子が描かれています。おそらくこの人々は、子どもたちが神様からの祝福を与えられて、健やかに元気に成長することを願って、子どもたちを連れてきたのだと思います。ところが、主イエスの弟子たちはこの様子を見かねて、「先生のおじゃまだ」と言って叱りつけたのであります。主イエスの説く神の国の教えが幼子たちにとっては、ちんぷんかんぷんであると思ったのか？それとも先の問答を中断させられたくない判断したのか？は分かりませんが、弟子たちは人々と子どもたちを、「あっちへゆきなさい」と言って、追い払おうとしました。けれども、主イエスは、弟子たちをたしなめ、「子どもたちを自由に来させなさい」と命じられました。そして、「天国は、この子どもたちのような者の国なのだから」(14 節)と言われ、子どもたちの頭に手を置いて祝福され、その場を立ち去られました。現在の日本のキリスト教会においても、「礼拝中にナースリー室の子どもたちの声が気になって礼拝に集中できない」などの苦情を耳にすることが、しばしばありますが、私たちも本日のこの場面から、子どもたちとの関わり方や姿勢について謙虚に学ぶ者でありたいと思います。主イエスが弱く、小さな幼子である子どもたちをこよなく愛され、「天国は、このような者たちの国なのです」と教えられたことを心に留めて、幼子たちが神様の祝福として与えられたものであることを、常に心に留めたいと思います。そして、私たち大人には、子どもたちを神様の許へ連れてゆく、子どもたちに信仰を継承する責任と使命があることを、今一度、自覚する機会としたいと思います。

さて、続く 16 節以降 22 節まで、ある金持ちの青年が主イエスの前に登場し、1 つの質問をしています。それは「天国に入るためには、どんな良いことをすれば入れるのでしょうか？」(16 節)との問いでありました。並行箇所であるルカ伝 18 章 18 節によると、この青年の職業は町の議員であったことが分かります。つまり、ユダヤ社会において、それなりの社会的な地位と身分を持った将来有望な青年であった、と言ってもよいと思います。また、このような内容について主イエスに質問をしていることから、青年は真面目で直向きな性格であったと考えられます。おそらく、彼はたくさんの良い行い(善)を積み重ねることによって、神の国(天国)に入ることが出来ると考えていたのだと思います。また、彼は人一倍プライドが強く、主イエスが告げられた律法に書かれた戒めに関しては、パーフェクトに守り行っています、と自信を持って応えました。彼は「そのようなことは全て、守っております。何がまだ、私に欠けている事がありますか？」(20 節)と質問をしたので、主イエスはさらに踏み込んで、このように言われました。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことにな

ります。そのうえで、わたしについて来なさい。」(22節)と言われました。主イエスがこの青年に向かって、このようなことを告げられた理由は、彼が自分自身の基準に従って、自分は正しい人間であると思い込んでいたからでありました。青年は世の中の物差しでは、生真面目で正しい人間の部類に属していたかもしれませんが、神様の絶対的な物差しで測った場合に、果たしてどうであるのか？彼自身の心の中に秘められた思いが露わにされる必要があったのであります。つまり、彼が「隣人を自分と同じように愛せよ」との戒めを、完璧に守っていると言うならば、あなたのすぐ側にいる貧しい隣人のために、自分の持ち物を売り払って分け与えることなど容易いことであろうと、主イエスは告げられたのであります。けれども、青年はこの言葉を聞くや、悲しそうな顔をして、その場を立ち去って行きました。何故ならば、彼は多くの財産を持っていたものの、富への執着心が非常に強く、それらを手放してまで、弱者に施す気持ちなどありませんでした。人の心の中を見通される主イエスの鋭い問いかけによって、彼の心の中にあるものが、この所において炙り出された形となったのであります。この富める青年の記事は、現代の私たちにとってどのような教訓を伝えているのでしょうか？それは私たち人間が己の力によっては、決して救いに到達することは出来ない存在であるということであり、主イエスが青年に向かって、「あなたの持ち物を売り払い、貧しい人々に施すように」とお命じになったのは、功德を積むことによって救われるという意味ではなく、彼が神様の戒めを完全に実行することなど出来ない、不完全な罪ある人間であることを自覚させるためでありました。

23節以降最後の30節までは、富める青年が悲しみながら主イエスの許を立ち去ったことを受けて、主は弟子たちに向かって、富める者が救いに至ることが如何に難しいかについて、当時のことわざを用いて、このように語っています。「あなたがたに言うが、富んでいる者が神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」(24節)と言われました。このことは、もちろん金持ちが救われないという意味ではなく、富や快樂が、しばしば私たちの心を惑わし、天国の門に入る妨げになるということを教えています。つまり、富裕層は、その莫大な富に絶対的な信頼を置き、それに依存し、目に見えない神様に対する信頼の心が薄れていまいと云うのであります。人が一生のうちに、どれほど莫大な富や名声を築き上げたとしても、それは神の国に至るまで、永遠に続くものではない、ということを教えているのであります。弟子たちがこの言葉を聞いて、驚きを隠せなかった理由の一つとして、当時の人たちにとって、富は神様からの祝福であるとの共通理解があったからだと思います。よって、彼らは主に従ってはいても、やはり富んでいる者たちは神の国に近いのであらうと感じていたからでありました。すっかり面食らってしまった弟子たちは、「だったら、この世の中で救われる人などいるのでしょうか？」と主イエスに問いかけ、主は彼らをじっと見つめ、「それは人間にはできないが、神が共におられるならば、何でもできる」(26節)と言われました。つまり、主は救いに至る道が、我々人間の側の努力や社会的な地位や身分によって得られるものではなく、神様ご自身の無限の愛と憐れみによって人が救いに至ることを教えられたのであります。ルカ伝の16章に描かれたあの貧乏人ラザロと金持ちのたとえ話は、まさしくその事を物語っている所以であります。人生、最後の最後まで分からず、最後にどんでん返しを食らうことがあり得るということを、私たちに告げています。一方で神の国に富める者と貧しい者との区別はなく、どんな破天荒な生き方をした者であらうと、己の罪を悔い改めて、神様のみ前に立ち返るならば救われると教えられています。

最後の所では、報いを期待するペトロに対して、主イエスは「わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子供、畑を捨てた者は皆、その100倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ。」(29節)と言われました。打算的な思いが見え隠れする弟子たち一同の思いを代弁しているとも言える、このペトロの質問に対しても、主イエスは丁寧にお答えになり、神の国のために、全てを捨てた者には、その幾倍もの報いが与えられることを告げられました。そして、主に従い続けることの最高の祝福が、永遠の命を受け継ぐことであると教えられたのであります。

本日、私たちは1年半以上続くコロナ禍にあって教会創立93周年の時を迎えさせていただき、主に感謝の思いを言い表すとともに、初代亀水松太郎牧師をはじめとして、主のみ跡にひたすら従い続けた私たちの信仰の先達たちの歩まれた足跡を想い起こす時としたいと思います。今後2・3年は続くだろうと言われるこの状況下において、打開策を見出す契機となりますように、共に心を合わせて祈ろうではありませんか。